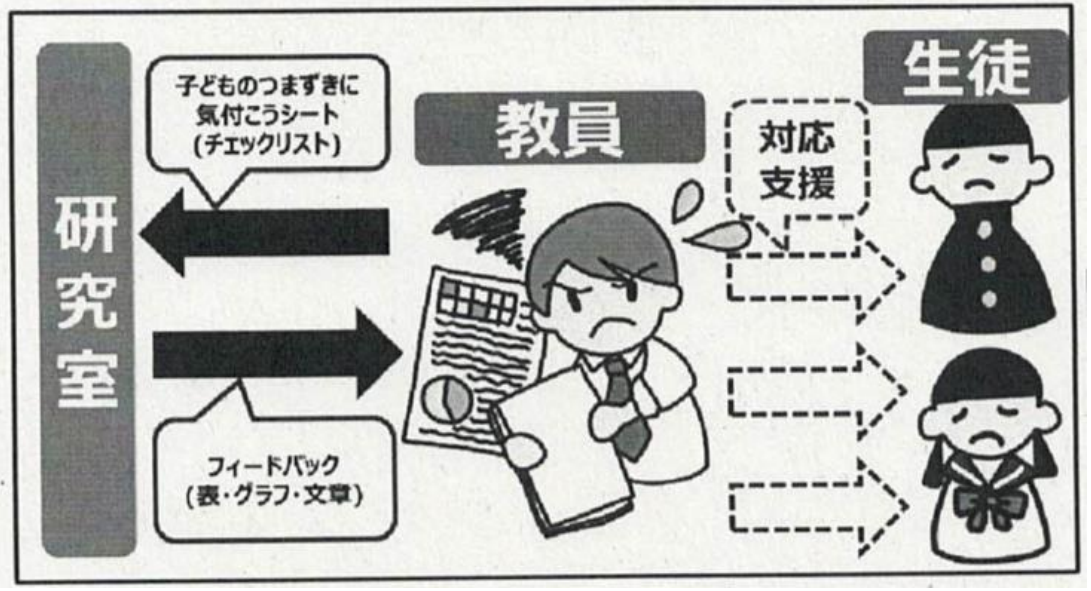
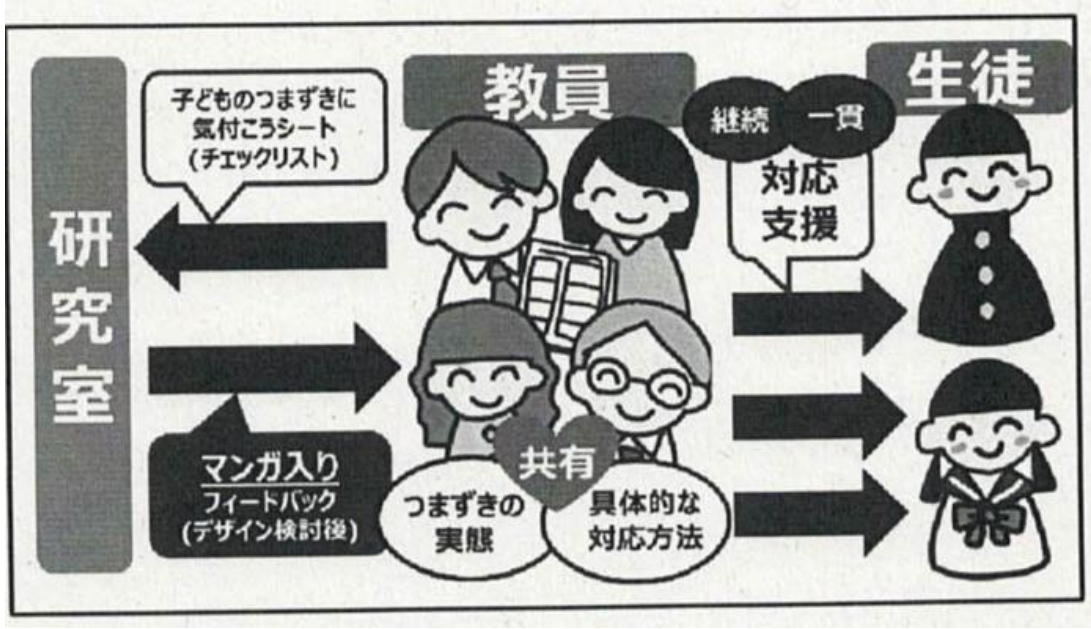
理解啓発イラスト集
中学校版

熊本大学教育学部特別支援教育学科
本吉研究室　　田島 舞



困難の背景や対応についての文章による
説明ではイメージが難しい



イラストによって生徒の気持ちと対応についての
理解啓発を促す

イラスト（4コママンガ）作成の背景と目的

ASD：自閉スペクトラム症　ADHD：注意欠如多動症

LD：限局性学習症　DCD：発達性協調運動障害

①

図2

ADHDの特性である不注意による聞き逃し、LDの特性である聞いて理解することの困難性を想定。

グループでの話し合い活動でついていけていない生徒がいる場合、書記の係が記録を取りながら話し合いを進めると、記録が話のテーマや流れを掴むための支援となる。

話し合いの流れを理解したり、ついていったりするのが苦手で、流れから外れた発言をする。

ASD：自閉スペクトラム症　ADHD：注意欠如多動症

LD：限局性学習症　DCD：発達性協調運動障害

②

図3

ADHDやLDの特性を想定。

授業中に作業を指示をする場面では、指示を黒板に書いたり、図を描いて示すことが理解しやすくなる。

口頭での指示を理解・記憶することが得意ではなく、行動できなかったり、周囲から遅れて行動する。

ASD：自閉スペクトラム症　ADHD：注意欠如多動症

LD：限局性学習症　DCD：発達性協調運動障害

③

図4

話すことの困難があるLDの特性を想定。

質問してもなかなか自分の意見を言えない生徒がいる場合、発問の仕方を『はい』か『いいえ』で答えられるようなものに工夫したり、選択肢を示すことで、その中から選ぶという方法が考えられる。

言いたいことはありそうだが、うまく言葉にならず沈黙したり、短い文章でつぶやく。

ASD：自閉スペクトラム症　ADHD：注意欠如多動症

LD：限局性学習症　DCD：発達性協調運動障害

④

図5

ASDのコミュニケーションの特性を想定。

授業中にグループで話し合う活動で、自分の知っていることを相手の理解を気にせず話し続ける生徒がいた場合、教員が入って、聞く側の理解を確認するという方法が考えられる。

相手の理解を気にせず一方的に話したり、話題を変えるなど伝わりにくい話し方をする。

ASD：自閉スペクトラム症　ADHD：注意欠如多動症

LD：限局性学習症　DCD：発達性協調運動障害

⑤

図6

ADHDの不注意の特性を想定。

授業やテストでケアレスミスが目立つ場合、問題用紙の最後に見直し確認の一言を入れるなど、生徒自身で見直しをするよう促す方法がある。

不注意なミスが多い。
(例：ケアレスミスが多いとよく指摘される)

ASD：自閉スペクトラム症　ADHD：注意欠如多動症

LD：限局性学習症　DCD：発達性協調運動障害

⑥

図7

LDやDCDの眼球運動の特性を想定。文字を探すことや、情報量の多い資料集などから指定された情報を探し出すことが難しいといった場面が考えられる。

黒板では注目させたい箇所や、生徒個人の教科書などをポインティングする方法がある。

指定された箇所を探し出す、動いているものを目で追うなど焦点を絞って見たり目で追うことが難しい。
(例：授業中「どこ？」と尋ねる様子が頻繁にある)

⑦

図8

LDの生徒を想定。漢字の細かい部分を間違ったり、同じ読み方をする漢字や、似たような意味を持つ漢字を書いてしまうということが予想される。

漢字を書くことが苦手な生徒には、似たような漢字で間違い探しの問題に取り組ませること、漢字の細部に注目したり、漢字を部分に分けて覚える方法を学ぶ方法がある。

文字の細かい部分を書き間違えたり、鏡文字で書く。

ASD：自閉スペクトラム症　ADHD：注意欠如多動症

LD：限局性学習症　DCD：発達性協調運動障害

⑧

図9

書くことの困難性を示すLDの生徒を想定。

文章を書くことが苦手な生徒には、文章構成を考えやすいように項目ごとに分けて書かけるワークシートや、穴埋めをすることで文章が完成するようなワークシートを活用するという方法がある。

作文を書く時、作文用紙や解答枠に見合わない文章量で書いたり、白紙のままで提出する。

ASD：自閉スペクトラム症　ADHD：注意欠如多動症

LD：限局性学習症　DCD：発達性協調運動障害

⑨

図 10

ASDのコミュニケーションの特性を想定。

友達の気持ちを推測することが苦手で友達関係のトラブルが多い生徒には、友達の気持ちを言葉にして伝えて、相手の気持ちに気づく方法がある。

友だちの気持ちを推測することが得意ではないためトラブルになる。
(例：トラブルの相手の気持ちを尋ねても「わからん」と即答)

ASD：自閉スペクトラム症　ADHD：注意欠如多動症

LD：限局性学習症　DCD：発達性協調運動障害

⑩

図 11

LDの推論の困難性を想定。文章問題で内容を整理して考えることが苦手な生徒が想定。

図や表にして整理できるようなワークシートを活用すると効果的。

複数のヒントを出しても関連付けて手掛かりにすることが難しい。

ASD：自閉スペクトラム症　ADHD：注意欠如多動症

LD：限局性学習症　DCD：発達性協調運動障害

図 12

ASDの柔軟な思考の困難性を想定。

話を聞いているように見えて、返事もするが、生徒に内容が伝わっていない場合には、生徒の納得がいくまで根気強く何度も話をしたり、紙に書いてまとめながら伝えるなどの方法が有効。

周りの人が思っていることを知っていたり推測できいても、自分の言動を改めたり内省することが難しい。

ASD：自閉スペクトラム症　ADHD：注意欠如多動症

LD：限局性学習症　DCD：発達性協調運動障害

⑫

図 13

発達性協調運動障害の生徒を想定。

体を動かすことや、体の動きの模倣が苦手な生徒には、体の動かし方を言葉で伝えたり、実際に生徒の体を一緒に動かすことで体の動きを捉えられるようにするという方法が考えられる。

運動で、体の動きがぎこちない。
(力が入りすぎる、協調が難しい、模倣が難しい)

ASD：自閉スペクトラム症　ADHD：注意欠如多動症

LD：限局性学習症　DCD：発達性協調運動障害

⑬

図 14

ADHDの注意の転導性を想定。

片付けが苦手な生徒には、物の置き場所を決めて伝え、物の定位置を習慣にする方法が有効。置く場所が決まっていると自然と片付き、物を探しやすくなる。

机上・ロッカー・鞄の中など物の整理をするのが難しかったり、落とし物や失くしものをする。

ASD：自閉スペクトラム症　ADHD：注意欠如多動症

LD：限局性学習症　DCD：発達性協調運動障害

⑭

図 15

ADHDの注意の転導性を想定。

窓の外の様子や音、周囲の人の動きが気になって集中できない、黒板を見るときは掲示物が多いことで目に入る情報量が多く授業内容に集中できないという生徒を想定。掲示物を必要最低限に減らして視覚情報を整理する、カーテンを閉めることで窓の外から入る情報を制限するなどの方法がある。

周囲の物音や見えたものに気がそれて集中し続けることが難しい。

ASD：自閉スペクトラム症　ADHD：注意欠如多動症

LD：限局性学習症　DCD：発達性協調運動障害

⑮

図 16

ADHDの不注意の特性を想定。

提出物を忘れたり、連絡や約束の内容を忘れやすい生徒には、常に目に入るように連絡を黒板に書いておくという方法がある。特に提出物忘れの場合においては、家で保護者に渡す用のファイルと学校で提出する用のファイルをそれぞれ違う色で分けて整理し、家と学校で必ずファイルの中身を出すように習慣づけるという方法がある。

連絡や約束、頼まれたことを忘れる。

(例：保護者・先生に渡さなければならない配布物をすっかり忘れる)

ASD：自閉スペクトラム症　ADHD：注意欠如多動症

LD：限局性学習症　DCD：発達性協調運動障害

⑯

図 17

ADHDの不注意の特性や、ASDの興味関心の偏りの特性を想定。

授業に参加できるようにするために、生徒が発言する機会や話し合いの時間を増やすこと、また、教員が話す時間以外に活動の時間を取るといった方法がある。

授業中にうわの空になっていたり、寝てしまう。

⑰

図 18

ADHDの衝動性を想定。説明の途中で次々と質問したり、話を最後まで聞かずに行動し始めてしまう生徒を想定。

話の見通しを持たせてから説明を始めるために、説明する前にその内容を書いたプリントを配布すること、最後に質問を受ける時間を作ることを伝えてから説明を始めるなどの方法がある。

話を最後まで聞かずに早とちりで発言・行動して失敗する。

ASD：自閉スペクトラム症　ADHD：注意欠如多動症

LD：限局性学習症　DCD：発達性協調運動障害

⑱

図 19

ADHDの衝動性を想定。授業中に頭に浮かんだことを話し始めてしまい、授業とは全く関係ない、違う話にまで発展して盛り上がってしまう生徒を想定。

「聞く／話す」を区別するため、今が何の時間なのか意識しやすいように「聞く時」には耳の絵を示すなどの方法がある。

頭に浮かんだことをすぐに口に出したり、会話を始める。

⑲

図 20

ADHDやASDで、気に入らないことがあると、壁を蹴るなど物に当たってしまうという生徒を想定。

別室で気持ちを落ち着かせるようにすること、生徒を責めたり、叱ったりすることなく、生徒の気持ちが落ち着いてから生徒の話を聞いて気持ちを理解しようとする態度をしめす方法がある。

気に入らないことがあるとかんしゃくを起こしたり、先生がなだめると余計に興奮する。

ASD：自閉スペクトラム症　ADHD：注意欠如多動症

LD：限局性学習症　DCD：発達性協調運動障害

⑳

図 21

ASDのコミュニケーションの特性を想定。嫌がっている表情を読み取れなかったり、時計を何度も見ている時に急いでいることを読み取れないといった生徒が想定。

表情や態度・動作が具体的どのような気持ちを表しているのか、言葉にして伝えるという方法がある。

相手の表情や態度(非言語情報)に合わせて応答を変えるのが難しい。
(例：相手が場や時間を気にしているのに構わず話す)

ASD：自閉スペクトラム症　ADHD：注意欠如多動症

LD：限局性学習症　DCD：発達性協調運動障害

㉑

図 22

ADHDの衝動性を想定。

状況に合わせて言うべき言葉を具体的に示すという方法がある。例えば、断りなしに人のものを手に取ってしまう、使ってしまう場合には「見せて」や「貸して」などの具体的な言葉を事前に言うよう伝える。

言葉で伝えるよりも行動が先に出る。
(例：断りなしに人の物を使う、席を離れる)

㉒

図 23

ASDの社会性やコミュニケーションの特性を想定。

授業の中で、生徒同士の関わり合いを増やすため、日頃話さないような生徒同士でも話し合いの活動を入れるという方法がある。あまり話したことがない友達とも、授業中に話す時間ができることで人間関係が広がる。

休み時間に一人で過ごしたり、興味関心・趣味があう生徒とだけ会話する。

ASD：自閉スペクトラム症　ADHD：注意欠如多動症

LD：限局性学習症　DCD：発達性協調運動障害

㉓

図 24

ASDの社会性やコミュニケーションの特性を想定。先生や先輩に敬語が使えない、役割関係によって礼儀や態度を変えることが苦手な生徒を想定。

役割関係によってどのように言葉遣いや態度を変えるのか、場面ごとに具体的に示すという方法がある。

【例：職員室に入る時にはノックをして「○年○組の□□です」と言うことを掲示する】

役割関係(先輩−後輩、生徒−先生)を踏まえて関わるのが難しい。

ASD：自閉スペクトラム症　ADHD：注意欠如多動症

LD：限局性学習症　DCD：発達性協調運動障害

㉔

図 25

騒がしい教室に入りずらいと思ったり、教室内で周りから自分が見られているような視線を感じるといった感覚過敏や不安の強さがある生徒を想定。

生徒が安心できる場所を確保するために、教室内の後ろの席にするなどの方法がある。

教師の変化や人の変化(言い方や態度など)に敏感で不安や恐怖を感じたり、本人にもわからない理由で学校や教室に入りづらい。